

市民活動の必要性

Y 大学：人文学部・人文学科・3 年

期 間：令和 6 年 9 月 26 日～30 日（5 日間）

私は、生まれ育った山口市に貢献できる職に就きたいと考えており、市民活動について聞いたことはあるけれど、その具体的な内容については知らなかったため、インターンシップを通して、市民活動は何なのか、自分が一市民として何かできることはあるのか学びたいと思い、参加を決めました。

インターンシップの中で、国際協力機構のワークショップへの参加や小学生と発達障害を持つ方及び保護猫の譲渡会を行っている方へのインタビュー、S(実習先)登録団体の広報のためのポスター作り、「〇△新聞」の取材、発送作業など多くの作業を行いました。

特に、印象深かったのは、〇△新聞の取材及び発送作業です。〇△新聞は S(実習先)が発行している市民広報紙で相手を否定せず受け入れるという言葉由来として名づけられており、市民活動を知らない市民に対して市民目線で書いていたり、山口市の中で気になっている社会問題を取り上げたりすることで、市民活動を身近に感じる・知って考える・行うきっかけを届けることを目的として発行している新聞で、年に 2 回発行されています。今回は小中学校や回覧板へと配布するための発送作業と次回の記事を描くための取材を行いました。取材のテーマは他県から山口を盛り上げようとして山口へきて町おこしに取り組む「地域おこし協力隊」についてで、山口市役所の農山村づくり推進課の方を招いて現状行われている事業や地域と関わるための関係構造などを学びました。このように、市民に情報を伝えるために、内容を話し合っただけで決め、取材を行って、各年代が楽しめるように漫画やレシピを取り入れたり、実際に読んだ市民にアンケートを行って、次につなげていけるようにしたりと多くの工夫が施されており、とても感銘を受けました。

インターンシップを通して S(実習先)及び市民活動のイメージが大きく変わりました。S(実習先)の主な役割として人と団体をつなげる役割を持つだけでなく、登録団体のサポート、活動場所の提供、相談などに対する回答、広報誌を介した情報発信など、多くの観点から市民及び活動している団体の支援の役割を担っていると思いました。そして、市民活動は、学校では学ぶことができない身の回りの解決すべき課題の取り組みを行っており、非常に意味があるものであると思いました。また、自分自身、最初は地域に貢献をするという点から行政と役割が重なる部分があるのではないかと感じていたけれど、行政のする地域活動はやるべきことをやる、市民活動の場合はやりたいことをやるというように、市民活動の方は自主性の側面を持つため、同じ考えを持つ人が集まって、何かに取り組む場合でもうまくいくとは限らないことから、目的を達成するために S(実習先)の支援が必要であるなどと思いました。また、NPO 法人という利益を分配せず、公平・平等を目的に、困っている人が少ないけれど解決すべき問題を取り扱うことは、一般の民間でも行政でもない立ち位置にある存在だからこそ出来ることだと思いました。私自身、今回参加してみて、ぜひ参加してみたい活動を発見したので、一市民としてボランティアという形で活動をして地域の問題について深く学び、地域に貢献できるよう行動できたらいいなと考えています。

観光における知識と発信力

Y 大学：人文学部・人文学科・3 年

期 間：令和 5 年 8 月 17 日～21 日（5 日間）

今回インターンシップで観光協会に参加した目的は、大きくは観光業について知ることである。私は観光業に興味があり、旅館やホテル等の宿泊施設や観光施設での仕事にも興味がある。その中でも観光協会を選んだのは特に観光一般の事業を扱い、様々な視点から地域の魅力発信を行うことで、観光業の基本的な側面を知りどういった職種が自分に向いているのを知ることができると考えたからである。また自分は大学で歴史学特に近世山口について学んでおり、将来歴史に関わることのできる仕事に就きたいと考え、現在学んでいることがどれほど生きるのかを知るため観光協会のインターンシップに参加した。

インターンシップ 1 日目は主に各職員からの業務説明、2 日目以降は観光案内所での観光案内体験や 10 月に行われる着物ウィーク企画提案や準備等、観光地での現地研修やパンフレット・HP 制作に関する業務を行った。

今回のインターンシップにおいて、観光業では情報発信が重要であることを学んだ。H 市について最初に持っていたイメージは、歴史観光がさかんなまちというものであり、観光に特化しているという印象があった。5 日間のインターンシップを通じて、H 市には歴史以外にも自然や食に関する観光資源も豊富にあり、また地域住民にも寄り添っているまちであるという事を感じた。H 市に訪れる観光客の多くは歴史的観光地を目的としており、そのため歴史に特化したパンフレットや地図、歴史のまちならではのイベントなどが多く見受けられた。また、各名所や、三角州である H 市自体が特長ある場所であり、その地形や気候を利用し海産物や夏みかんなどの食にも恵まれた土地となっている。歴史以外の側面の観光施設や資源も活用しており、時期や年齢問わず楽しむことができるような資源が豊富であるからこそ、発信する情報の取捨選択が必要となってくる。観光協会ではパンフレットや HP・SNS を用い、いつ、誰をターゲットにして情報提示をするのか、どのように広く知ってもらえるかなど様々な工夫がなされていることを学んだ。

そして観光業においてはその土地についての知識が重要であることも感じる事ができた。その土地全体の魅力を発信するにあたって、地域に根差した文化を形成するのはその土地の風土が大きくかわり、また自然に関してもそれを守ってきた地域の歴史なども絡んでくるため、歴史だけ・自然だけでなく幅広い知識が不可欠である。また観光客に説明する際の知識とパンフレットなどに情報を乗せる際の知識は別物であり、知識をどのように使うのか見極めることも必要であると感じた。今回観光業を実際に体験したことで、将来の職業選択において歴史を基軸とした地域の魅力や伝統文化の良さ等を発信していきたいと改めて感じる事ができた。普段はなかなか見ることのできない職場の様子や社会人としての姿を間近で体感することもでき、とても充実し学び甲斐のある 5 日間の研修であった。

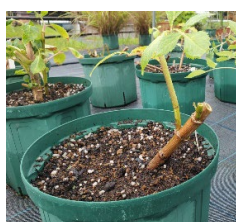
働き方のコツ

TK大学：環境学部・環境学科・3年

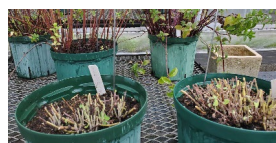
期間：令和4年8月11日～16日（5日間）

今回のインターンシップではイベントの企画・運営や植物の栽培管理について体験し、学ぶことができた。初日は事業所の歴史について伺い、園内や施設を見て回った。また、ホームページに掲載されているブログの記事を1日のみ担当させていただき、園内の花をテーマとして施設の宣伝を行った。その後、翌日開催される体験教室やガラポン抽選会などイベントの準備のため、教室の設営や賞品の設置を行った。2日目、3日目はガラポン抽選会を担当した。1等から10等まではずれなしの抽選会で花や観葉植物、おもちゃ、特産品などが賞品として用意されていた。抽選会に訪れたのは子供からお年寄りまで様々であった。それぞれの年代や雰囲気などを意識して、どのような対応をするとよいのか考えながら行った。特に難しいと感じたのは9等や10等などお客様の希望でない色の玉が出たときの反応である。担当の方々から、アドバイスをさせていただき、お客様に楽しい思いをしてもらうためにはどのような反応をすべきなのかを意識して行った。4日目は地域おこし協力隊の方と行動させていただき、1日の流れ、仕事内容などを伺うことができた。その方は、お客様へのあいさつを欠かさず、気さくに会話をされており、お客様がとても楽しそうに、嬉しそうにしていたことが印象に残っている。その方の素敵な対応から、仕事をただこなすだけでなく、お客様とコミュニケーションを取ることの大切さを学ぶことができた。5日目は栽培管理を体験させていただき、ダリアとミントの切り戻しや清掃、鉢の洗浄、荷下ろしなどを行った。暑さや湿度、急な雨などがある環境下で、力仕事など行うため体力的に厳しい面もあったが、やりがいのある作業だった。

以上の体験を通して、実際に働かれている方のお話を伺い、仕事に対する責任やうまく働くためのコツを学ぶことができた。社会では仕事を計画し、指示する役割の人、その指示を受け、作業をする人がいるが、それぞれの立場で異なる苦労があることを互いが理解することが仕事をするうえで重要であると感じた。また、働くうえで身体の健康はもちろん、心の健康の重要性も学んだ。自分自身や周囲の人に対する些細な、気遣いや心掛け次第でストレスが緩和され、より働きやすくなるのだらうと感じた。イベントの企画などデスクワークだけでなく、現場での作業など両方を体験することができ、充実した5日間であった。



ダリアの切り戻し



ミントの切り戻し



ガラポン抽選会

まちづくりの現状と大変さ

0 大学：経済学部・地域政策学科・3年

期間：令和2年8月24日～28日（5日間）

私は、大学のゼミで地方創生について学び、興味を持ったため、商工会議所のインターンシップに応募した。

今回のインターンシップ実習で1つ目に学んだことは、商工会議所の業務についてだ。商工会議所自体は知っていたが、実習を行うまでは、検定試験やまちづくりを行っているなどのざっくりとしたことしか分からなかったが、この実習を通して、より詳しい業務を知ることができた。その中で中小企業や起業をしようと考えている人に対する支援に特に力が入っているなど感じた。また、現在の会員数やその目標、その中でだれが強い権限をもっているか、道路を借りる際にどこに許可をだすかなどの詳しいことについてもたくさん学んだ。

2つめに学んだことはまちづくりの事とその厳しさについてだ。当然、インターンシップ実習を行う前から地域を盛り上げることの厳しさはわかっていたが、地元の現在の状況を改めて間近に見ることやお店の人の話を聞くことによって、より詳しく知ることができた。その中でその地域を盛り上げるためには、地元のお店や企業の力が必要不可欠だなと感じた。チェーン店を集めるだけでは、当然他の地域も行っているため、かなり厳しい競争になってしまう。そこで、地元のお店を盛り上げて、その地域特有の魅力を引き出していくことが大事だと思った。

このまちづくりに関することで特に印象に残ったことが2つある。1つ目は、現状を見る際に商店街やその周辺のお店を周ったことによって、自分が知らないようなたくさんの魅力を持つお店が地元にはたくさんあることが分かった。しかし、その魅力を周りに伝えることが難しいため、どのようにすればこの魅力がもっと広まって、人が集まるようになるのかなと思った。2つ目は、「まちづくりには終わりはない」という言葉だ。例えば、まちづくりに成功してその地域が盛り上がって、人が集まった場合、そこでまちづくりをやめてしまったら、その地域は廃れていくかのうせいがある。この言葉について聞いた際は、まちづくりは、その地域が発展したら終わるのではなく、その状況を維持することや更に発展させていくことだと私は改めて思った。

3つ目に、応接室でのマナーや名刺の受け取り方や差し出し方、電話対応マナーなどのビジネスマナーを学んだ。応接室などに上座や下座があることは知っていたが、エレベーターにもあることは知らなかったし、電話を受け取る際は、ベルが2コールの時に出るなどのマナーを知らなかったため、とてもためになった。特に先に話してからお礼をする、語先後礼や電話を受け取る際は最後に名乗るほうが良いなどが特に重要だなと感じた。

このインターンシップ実習を通して、商工会議所の業務やまちづくりに関することなどの地方創生に関することやビジネスマナーなどの様々な分野でも生かせることも学んだ。住んでいても気づかないような魅力がたくさん詰まっている。しかし、その魅力を最大限に引き出すことや周りに伝えることの難しさを改めて感じた。現在、大阪に住んでいるが、都会ならではの経験などをインプットして、地元で活かしていくなどの今の自分だからこそできるような形で貢献していきたい。

「ブライダル」と「デザイン」の共通点

YK大学：国際文化学部・文化創造学科・3年

期間：令和元年9月12日～16日（5日間）

私はこの夏休み、結婚式場のインターンシップに参加した。ブライダル業界のインターンシップへの参加を決めた理由は、単純に個人的な興味があったからだ。私は、結婚とは人生の節目になる一大イベントであり、式を挙げる人たちにとってはとても幸せなことであると考えている。そして、結婚式はその幸せを象徴するものだとも思っている。そのため、その結婚式が執り行われるまでにはどんな工程が踏まれるのか興味があった。

今回のインターンシップは本当に緊張の連続だったが、同時に、とても新鮮な体験になった。「会場をつくる」という方面では、バンケットを体験させていただいた。テーブルクロスの畳み方と掛け方、グラス拭きや食器のセッティングなどだ。結婚式の引き出物を作ることにも関わった。また、実際の披露宴に立ち会う機会も三日目にあり、そのときは実際会場に出てお客様への対応をした。私は接客業を経験したことがなかったため非常に不慣れだったが、社員の方の指導のもとどうにかやりとげることができた。また別の日には衣装部の仕事も体験させてもらったが、こちらは案外体力仕事で思ったよりも苦戦した。衣装部と式場は離れたところにあり、新郎新婦やその両親が使用する衣装、会場のマネキンに着せるドレスの搬入や回収など、ドレスが見た目以上に重く移動に体力を要した。貸し衣装のため、レンタル期間が重複したりしないか、いつ戻ってくるのかなど、情報が綿密に管理されていた。ただ、貸し衣装屋だからといって衣装の管理だけしていればいいというわけではなく、衣装に迷う新郎新婦に対して、理想に近いものやその人に似合うもの、実際の会場に映えるものなどを、色やモチーフまで考慮に入れて提案する必要がある。そうした関係性を築くまでには通常半年から一年程度の時間が必要で、また、人に提案するためには自分自身がきちんとした知識を持っていないといけない。そういう意味で、知識欲、知識量と、コミュニケーション能力が求められる仕事だ。

私は今回のこの経験を通して、結婚式を構成するまでの流れには、私が現在大学で勉強しているような「デザイン」にも通じるものがあるかも知れないと感じた。結婚式はその主役となる新郎新婦の意見を反映して形作られるもので、漠然としたイメージから具体例を提示するなど、スタッフの手で実現の可能性を高める必要があるという。そこにはやはりその新郎新婦らしさが出るもので、実際現場のスタッフも、「似たようなものを見たことはあるが、まったく同じものは見たことがない」と話していた。学校で何かをデザインする際にも、与えられたテーマに対して考えを膨らませ、それを自分の手で実物に起こしていく。

私は今回、その「デザイン」にあたる部分には深く関わることはできなかったが、より「現場」に近いところでそれを学ぶことができ、また、自分の「デザイン」に対する意欲を高めることもできた。今回得たことを、これからの制作や、最後の卒業制作まで活かしていきたい。